

令和8年度全国学力・学習状況調査及び佐賀県小・中学校学習状況調査の結果について

- ・各学校の取組によって、**児童生徒の学ぶ姿勢の変化**が見られたことは評価できる。
- ・全国学力・学習状況調査の結果は、全国平均正答率との差に過度に注目せず、**本質的な課題を捉える**べきである。
- ・「ここまで分かったけど、ここは分からないから次はこうしていこう」という、**次につながっていく「学び」**が大事である。
- ・「分かった」「できた」という学んだ**成果に向かう途中過程が、すでに「学び」**である。
- ・全国学力・学習状況調査の問題は、**国からの授業改善のメッセージ**として活用する。
- ・**教科横断的**なつながりや学年間・校種間を見通した**系統性**の視点をもつことが重要である。
- ・**家庭学習の重要性**を分かりやすく、保護者へ伝えていく工夫が必要である。
- ・どのような宿題がよいのか、一律に出していたものから問い直す。「3学期に何ができるようになってほしいか」から考え、**宿題の出し方の工夫を1年間のスパンで考える**。
- ・低学年は、保護者のサポートが必要な場合もあるが、学年が上がるにつれて少しずつ親の手が離れていくようにすることが理想である。「ここまででは分かったけど、ここからは分からない」に学校でも寄り添う。
- ・家庭学習においても、**過程が大事**である。AIが普及する中、**学ぶ目的や意義を考えることが重要**である。

学力向上対策に関する協議

- ・**良い授業をみる、授業をみてもらう機会を増やす**。良い授業を見てきたときには、先生たちにスイッチが入る。
- ・小規模校では同じ教科の教師が学校に1人だったり、小学校の専科の教師が学校に1人だったりする。より一層、**横のつながりが大事**になってくる。学力向上の**小中連携**も大事である。
- ・保護者と連携しながら、教師が**学力向上に専念できる環境**にしていくことが必要である。
- ・**「教師も学習者」**であり、**教師自身が学ぶたのしきを感じる**ことが、子どもたちにも伝わる。自然の中での実体験などを研修に入れるなど、視点を変えた研修の在り方も考えられる。
- ・乳幼児期からの**自己決定の経験**や**対話型の会話**(「どう思う？」など)が大事である。
- ・子どもを真ん中において、**安心・安全な環境**を学校、家庭、地域でつくることが土台となる。**子どもの心の安全基地**をつくっていくことが学ばってたのしいにつながっていくと思う。
- ・**「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組**は、引き続き継続・充実を図ることが望ましい。
- ・県教委の合言葉「ほめるから、はじめる。はじまる。」にあるように、**先生からほめられたことは、子どもの心に残る**。それが「たのしい」につながると思う。